

セルゲイ セドフ
動物の王様

ある日ぬいぐるみの動物たちは、自分たちの王様を決めることにした。

みんなは、すぐに百獣の王ライオンが王様になるべきだということで一致した。だけど…どの？問題は、ぬいぐるみ売りにライオンが三匹いることだ。一匹目は大きな体のライオン。二匹目は大きな声のライオン。そして三匹目は小さくて静かなライオンだ。

「私たちの王様には大きな体のライオンになってもらおう！」と前世紀からぬいぐるみ売り場にいる長老ガメは言った。「この王様のことはみんな怖がるじゃろ。お風呂のアヒルも錫の兵隊もロボットトランスフォーマーも！こうやって、大きな体のライオンはぬいぐるみの動物たちの王様になった。ライオンはすぐに一番上の一番人気がある棚から二匹のゾウと三匹のサルを追い払い、自分がそこに上ると動物たちの王様に君臨した。残り全ての動物たちは、床でひとかたまりになった。彼らは王様の前に跪いて《彼こそは、本物の王様だ！》と思った。

ところが王様は突然買われたのだ！買い主の名前はアルセーニー。六歳の小さい男の子だ。もし、ライオンが一番高い棚にのぼらなかつたら。もし、ライオンがあんなに大きくなかつたらアルセーニーは店のカウンターにじゃまされて一生このライオンを見ることはなかつたらろう。

「わたしたちは王様を失ってしまった！」と長老ガメが言った「だが悲しむことはない！大丈夫じゃ！わたしたちの新たな王様には、大きな声のライオンになってもらおう！」

みんなとても王様を欲しかったので賛成した。

大きな声のライオンは、すぐに大きな声で吠えた。

「ガーオーオーオーオーオー！」そのせいでぬいぐるみだけではなく、お風呂のアヒルも錫の兵隊もロボットトランスフォーマーも静まり返った。おもちゃの鉄砲も打つのをやめ戦車もうなるのをやめたほど。二人の店員が気絶して、店長室の檯のテーブルはガタガタ震えた。

ぬいぐるみたちは、大きな声のライオンを見て《彼こそは本物の王様だ！》と思った。

ちょうどその瞬間ワーシャがトイザラスに入ってきた。彼はプレイヤーのイヤホンをつけていた。彼の耳にライオンの吠え声が届いた。それほど大きな声でライオンが吠えていたからだ。ワーシャはそその場でライオンを買った。彼は、大き

な音がするものは、全て好きだったからだ。

かわいそうな動物たち！こんな最悪な出来事の後では、長い間我に帰ることができなかった。多くの動物たちは大泣きした。ぬいぐるみたちにとって濡れることはとても有害だったんだけど。その時長老ガメは言った。

「ぬいぐるみたちよ、泣くでない。私たちにはまだ三匹目のライオンがいるではないか。彼にしよう。小さくて静かじゃが、ライオンじゃ。」

こうやって、小さくて静かなライオンは、ぬいぐるみの動物たちの王様になった。彼はまた、とても謙虚だった。いつ何時も彼は前に飛び出すことなく、ゾウやカバの背中から顔を出すこともなかった。買い物客はライオンに気づかず、彼はずっとぬいぐるみコーナーを治めていた。彼は今でも、そこを治めている。君たちはあなんで動物がおとなしいと思っていたの？なんで喧嘩もせず、ロボットとも戦わないのか知っていた？なぜなら彼らは、知っているからさ。どこか近くに存在感のない静かな王様がいることを…。

だけど君たちの中の誰かが、小さくて静かなライオンのことを見つけて、それに買ってくれたら、実を言うとね。ライオンはとっても喜んでくれる。王様でいることはもちろん素敵なことだけどお気に入りのおもちゃでいることはもっと素敵なことだもの。ぬいぐるみコーナーのことは心配しないで、風の噂では、もうすぐ新しいライオンが7匹か8匹入荷するらしいから。